

あまんじゃこのいたずらがし

「大人」の子孫らしいあまんじゃこは、いつもいたずらをしては喜んでいました。

【いたずらその1】

中区の真ん中あたりに太子山と丘山というあわんをふせたような形の2つの山が並んでありました。

ある日、あまんじゃこはこの2つの山を動かして、里の人たちを驚かそうと思いました。

そこで、2つの山を天秤のようにつりあげてうごかそうと長い石の棒をさがしてきました。その石を天秤棒にひいてつりあげようとする中、ポキンと折れてしまいました。



丘山と太子山（中区）

時が流れて、村の人たちが村の中を流れる川を掃除していたらその折れた石の一部を見つけたと伝えられています。それが、奥中に残っている「長石」のいわれです。



あまんじゃこの長石（中区奥中）

【いたずらその2】

ある日の夕方、里の子どもたちが夕焼けの空を見ながら「妙見山と笠形山に虹のような橋がかかったらきれいやろな」と話しているのを耳にしました。「あまんじゃこやったら、大きい力持ちやから橋がかかけられるかもしれへんな」「なんぼ大きいてすごい力持ち言うても、あかんあかん」。

それを聞いたあまんじゃこは「何やて、わしにでけへんことがあるやて、そんなことあるかい」、「見とれ、一晩のうちに橋をつくらせ、びっくりさせたる」。

暗い中、石をつかって土台をつくりました。そして、橋となる長い木をさがしましたが見つかりません。そこへふくろうがやってきて「どんがり山へ行ってみな」と教えてくれたのですが、そこはあまんじゃこ、反対の方に行ってしまうした。とうとう見つからないまま朝になり、あわてて姿をかくしてしまいました。



あまんじゃこの腰掛石（中区曾我井）

橋をつくらせようとした笠形山には石の土台になったと伝わる石柱があります。あまんじゃこが一休みするために腰をかけたという石も残っています。この石に座りながら、「次はどんないたずらをして里人をあどろかそうかな」と考えていた



あまんじゃこの石柱（笠形山登山道）

OH!TAKA・RA 風土記

昔、大人（おおひと）がいました。

この大人が、南の海から北の海へ、さらに東に巡行したときに、この土地にやってきて言いました。

「ほかの土地は低かったんで頭がいつも天につかえるから、身をかかめて歩いたけれど、この土地は天が高いので、体を伸ばして歩ける。高いなあ〜」。

そこで、この地を託賀郡（たかのこおり）というようになりました。また、大人の踏んだ足跡は、たくさんの沼となりました。

＊『播磨国風土記』託賀郡条より（現代語訳）

託賀郡＝多可郡

ふ ど き 風土記とは



古代播磨国と託賀郡

元明天皇の時代、和銅6年（713）5月2日に、諸国に向けてある命令が発せられました。

「郡郷（里）によき名前を付けよ。鉱物・植物など郡内の特産品や土地の肥沃さ、地名の由来や古老の伝える旧聞・異事を（朝廷に）報告せよ」という命令です。諸国から提出された報告書（解）は、後に『風土記』と呼ばれるようになりました。

現在、その写本が伝えられ、1300年前の姿を知ることができる国は、常陸国・出雲国・肥前国・豊後国、そして播磨国のわずか5カ国だけです（後の書物に引用された「逸文」が残るのは20数カ国ほど）。

その頃の播磨国には12の郡（こおり）がありましたが、その内10郡の記述が残っています。その一つに託賀郡（現在の多可町～西脇市周辺）があります。

